

田舎に帰ったニューハーフ

実家の玄関を出たところで溜め息をついた私――。

やっぱり勘当されてしまった。それは無理もなかった。高校を卒業して上京したときは男の子だった私が、女の子になって帰って来たんだから。

私の姿を見た父たちは、目を白黒させて驚き、バケモノを見るような目で見て、性転換したことを話したら激怒した。父は怒り狂い、母は泣いていた。一人息子だった私は自分の意思だけで性転換して、女の子になってしまったのだ。

両親には反対されると思って何も言えなかった。それがよくなかった。両親ともに私のことを非難して、罵詈雑言を浴びせて「出ていけ！ 二度と帰って来るな」と言って、私を追い払ったのだ。

想定内の展開とはいえ、やはり心は傷つき、凹んだ。

高校を卒業して、すぐに上京した私だった。やりたいことがあって出て行ったわけではなかった。ただ東京という都会に憧れて住んでみたかったのだ。いろんな経験をして、一回りも二回りも大きくなって帰ってくるつもりだった。

でも、いつしか都会の色に染まり、自分の希望とは違う道に逸れてしまった。都会には綺麗な女の子がたくさんいた。遊びたいという気持ちが強く出て、最初の頃はお金もないのに遊んでいた。

だがある日、友達の誘いでニューハーフパブに行ったときのことだった。彼女たちの華やかな輝きの虜になってしまったのだ。男なのに、女の格好をしている人たちを見て、私もそれになりたいと思ってしまったのだ。

おっぱいを豊胸して、ブラをして、女性の格好をしたい気持ちが日に日に強くなって、ついには自分も女装を初めて、ニューハーフクラブで働くようになってしまった。

毎日が楽しくて、お客さんの相手をしていたら、自分の中にも女の部分があると思い始めた。そうなったらもう止まらなくなり、どんどんエスカレートしてしまった。

お店に来たお客さんとホテルに行き、男の子として抱かれるようになり、それがまた快感で、男性に抱かれることが平気になってしまった。男モードでは絶対無理なのに、女装をするとそれが平気になるのが自分でも不思議だった。

そしてアナル開発も始めて、アナルセックスもできるようになると、私はニューハーフヘルスに入店した。たちまち稼ぎは増え始めて、月に一〇〇万以上の収入になったのだ。

そうになると、もう金銭感覚は麻痺して、車を買って、アクセサリーを買いまくって、いいマンションに引っ越したりもした。

そんな生活が一年も続くと貯金も増えた。もっと女の子らしくなりたいと思った私は、貯めたお金で思い切って性転換手術をしてしまったのだ。

ペニスを取り、S字結腸法で穴を……、つまり女性器を作ってしまったのだ。最初は、そこまでしていいのかと悩んだが、徐々に慣れてきて平気になってしまった。

同時に女性ホルモンを投与しながら、胸も膨らんできて、さらに豊胸して自分の満足のいくバストを手に入れたのだった。

ここまでくると本当に女の子で、いざ覚悟を決めると女の子としての生き方はそれなりに楽しくて、私は有頂天になっていた。

だが不思議とお店の収入は減ってきた。まったくないわけではないが、竿まで取ってしまったので、人気が落ちてしまったのだ。

暗雲が立ち込めてきたのはそこからだった。徐々に収入が減っていき、不安は募るばかりだった。

やはりニューハーフヘルスという所はペニスがある方が人気があって、ないと人気が落ちるらしい。それでもこんなに落ちるとは思っていなくて、貯金は底をつくようになってきたのだ。

ペニスまで取るべきではなかったと後悔しても後の祭り、もうどうしようもなかった。

これではいけないと、安いアパートに引っ越して、車も売ってしまった。日に日に生活はキツくなり、苦し紛れのユーチューブチャンネルを始めたのだが、これも上手くいかずに、動画を作る気力もなくなり、私は挫折してしまったのだ。

実家に助けを求めるために帰ってきたのだが、父も母も青天の霹靂のような顔で、私に向かって暴言を吐いた。

「もう二度と帰って来るな！ 黒木^{くろぎ}の苗字も語るな」

と言われてしまったのだ。

確かに私一人の問題ではない。正月には親戚中が集まり、当然私のことも話題に上がるわけで、両親は世間に顔向けが出来なくなってしまったのだ。息子が女になったなんて、言えるわけもないし、そんなことが知られたら恥ずかしくて外も歩けないのだ。

私はそこまで考えていなかった。ただ自分の欲求のためだけにやってしまったのだ。女の体になったことには後悔していないが、親に対しては申し訳ないと思っていた。

結局、行く当てもなく私は田舎の道を重い荷物を持って、とぼとぼと駅に向かって歩いていた。

父か母、どちらかは私の気持ちを理解してくれるかと思ったが、どっちも駄目だった。これからどうしようと考えていると、見覚えのある顔に出会ったのだ。

「あれケンジじゃね？」

私は思わずそう叫んでしまった。それは中学時代からずっと仲良しだった竹内健司^{たけうちけんじ}だった。彼とは高校の文化祭でバンドを組み、全校生徒の前で歌を披露した仲だった。ケンジは私の顔を見て啞然としていた。

「えっと……」

私は自分が性転換していることも忘れてしまうくらいに懐かしかった。

「あ、ああ……そっか」